

## 緑の文明首都戦略（1）

### 戦略の目的



武蔵野を再現するアゼターフ（左050704、右050720撮影）

2008年11月15日、私たちは「もみじサミット」を開催した。欧米7カ国から65人、国内から25人、総勢90人が参加した。

もちろん海外の人たちは、もみじに関心がある人たちであったが、意外というか、やっぱりというか、福島県の里山の植生におおきな関心をもっていただいた。

ポーランド植物園園長のベネチェック博士やアメリカ合衆国立樹木園主任研究員のオルソン博士などは、失礼ながら脱兎のように、あるいは山猿のように、林の中に入って行って、時間を惜しみながら、植物を観察した。



もみじサミット（2008年11月15日、青生野ガーデン倶楽部）

海外の植物研究者をも魅了するように、日本の植生は種類が豊かで、私たち日本人は少なくとも1万年前の縄文時代から植物と関わって独自の文化を形成してきた。

以下の歌や報告記は、万葉時代から江戸時代まで、日本人が植物を愛し、生活の一部に取り入れた生活を送っていたことを示している。

天平勝宝六年（754）

「八千草に 草木を植ゑて 時ごとに 咲かむ 花を見つつ 偲はな」  
さまざまに 草木を植えて 時節ごとに咲く花を 見て楽しもう  
大伴家持 『万葉集』 卷 第20



野の花を採取して庭にうえた「前栽」を伝える毛越寺庭園（岩手県、平安時代末期）

天正十三年（1585）

「われわれは、庭に果物のなる木を植える。日本人は、その庭にただ花を咲かせるだけの木を植えることを、むしろよろこぶ」

ルイス・フロイス（信長の時代の宣教師）『ヨーロッパ文化と日本文化』

万延元年（1860）

「もしも花を愛する国民性が人間の文化生活の高さを証明するものとなれば、日本の低い層の人びとは、イギリスの同じ階級の人達に較べるとずっと優って見える」

ロバート・フォーチュン（イギリスの園芸植物家）『幕末日本探訪記』

20世紀最高の歴史家とされるブローデルは、「文明とは、空間的にまとまり、時間的に継続されてきたもの」と定義している。

日本人は、自然と関わる生活様式＝文化を築き、文字で確認できるのは1100年前であるが、それよりもはるかに遡る縄文時代からその文化を蓄積して、「緑の文明」を形成してきた。

緑の文明は、首都である江戸で結実し、江戸は当時としては世界に冠たる庭園都市であったと評価されている。

ところが現在の首都東京は、開発と自然とのバランスを欠いて、庭園都市としての面影はない。

緑の文明首都戦略の目的は、東京の再生を、単に緑色に染める「緑化」ではなく、豊かな自然と人間との関わり、すなわち文明史の観点から考察し、人間性を回復するための自然再生につなげる、ことである。

## 緑の文明首都戦略 (2)

### 縄文時代からの植物文化



武蔵野を再現するアゼターフ (左：050723、右050803)

関東平野の台地は、数段の段丘面からできている。段丘は13万年前の下末吉期の海進と海退による侵食と火山灰の堆積によって形成された。段丘は高位のものから多摩段丘・下末吉段丘・武蔵野段丘・立川段丘に大別される。高位の段丘ほど年代が古い。また最高位の多摩段丘は多摩丘陵と呼ばれ、侵食が進んで、平坦面を残さない(羽鳥謙三「関東ローム層と関東平野」)。

多摩丘陵には1960年代以降、ニュータウン建設に伴う発掘調査が行われて、縄文時代の遺跡が多数発見された。

縄文時代には、煮炊き具である土器や調理具である石皿と磨石の発明によって、食料としての植物利用が飛躍的に発展した。植物利用が効率的になった結果、定住が可能となった。

定住的な生活は、周辺環境にも影響を及ぼした。住居の周辺のもりがを切り開いた結果、クリやドングリを産するコナラ・クヌギなどが生育する二次林が形成され、林縁にはワラビ、ゼンマイ、ヤマイモなどの有用植物が生育できる環境が整った。



青森県三内丸山遺跡（縄文時代中期：4000年前）



岩手県一戸町御所野遺跡（縄文時代中期 4000年前）

青森県三内丸山遺跡など、近年の縄文遺跡の発掘調査は、従来の縄文時代観を一変させた。

それは木造建築の多様性と規模の大きさである。幹周1mを越すクリ材を立てた巨大なモニュメント、長大な竪穴住居址、高床式倉庫など、高度な建築技術が駆使されている。



福島県桧枝岐村「国指定歌舞伎舞台」の芝棟・オニユリ

建築史的に、あるいは今日の屋上緑化の先駆として重要なのが、三内丸山遺跡や御所野遺跡の復元住居に見られる「芝棟」である。これは茅葺き屋根の頂部に野草密度が濃い自然のターフを載せて雨漏りを防ぐもので、第二次世界大戦前後には東日本に普遍的に見られたもので、それが4000年前に遡るということは、住における植物利用の伝統として注目される。

芝棟には食用や鑑賞を兼ねてユリ科植物やアヤメ科などを補植するが多い。元禄十年（1697）に刊行された『農業全書』には、飢饉に備えて、屋根（芝棟）にユリ科植物を植えることを奨励している。

万延元年（1860）、日本を訪れたイギリスの園芸植物家ロバート・フォーチュンは、神奈川の宿場風景について、「（農家）の屋根の背に、ほとんど例外なく、イチハツが生えていた」と報告している（『幕末日本探訪記』p74）。

さて、日本における稲作の開始年代については、近年歴博研究グループの問題提起によって議論が展開されている。

この研究グループによれば、関東地方は自然の食料資源が豊富であったために、日本海側沿いに伝播した弥生文化の受容が、東北地方より遅れたという。

この問題提起については、今後他の考古学者からの議論も出されるであろうが、自然の食料資源の重要性を評価しているという点では納得がいくものである。

本が手元に無いので定かではないが、渡辺誠名古屋大学名誉教授は『縄文の植物食』という本の中で、縄文時代の植物食の重要性を指摘するとともに（それまでは縄文時人は鳥獣

を追って生活しているイメージがあった)、稲作導入後も植物食の重要性は明治時代までは変わらなかったと指摘しており、この説は現在では定説となっている。

米沢藩第7代藩主上杉鷹山公の命によって編纂された『飯糧集』(1783年)と『かてもの』(1802年)には、あわせて50科144種の食料となる植物が記されている。

私たちが現在食べているワラビやゼンマイなどの山菜はそのほんの一部で、縄文時代以来の自然植物を利用した食文化の延長にある。



山形県置賜地方の「草木塔」(江戸時代)

さて山形県南部の置賜地方では、江戸時代に「草木(供養)塔」が建てられた。これは草木にも魂が宿ると考え、木を切り倒す時に、その魂を供養するものである。精神的なものであるため、確証はないが、縄文時代より続いた自然崇拝の一つの現われだと、私は注目している。

## 緑の文明首都戦略 (3)

### 古代武蔵野の開発と景観



武蔵野を再現するアゼターフ

「私の祖先は代々、杖刀人の首(おさ)を務めてきました。私は雄略天皇に使え、天下を治める補佐をしてきました。そこで辛亥年(471年)7月に、これまでの輝かしい功績を剣に刻んで記念とします」(国宝：埼玉(さきたま)稲荷山古墳出土金象嵌鉄剣銘文)

この銘文は大和朝廷と後に武蔵国に含まれる埼玉古墳群の盟主との関係を示すものだが、この銘文が示す5世紀後半以降は、関東から東北南部の広域にかけて、厨房施設としてのカマドを備えた住居で構成される100棟規模の大規模集落が出現する。

7世紀後半には、武蔵国が設置され、現在の埼玉県、東京都、神奈川東部を含む。7世紀後半から8世紀中葉にかけては、百済・高麗・新羅からの渡来人の移住が進められ、霊亀二年(716)に高麗郡、天宝宝字二年(758)に新羅郡が設置されている。

また律令国家の東北経営に伴って、武蔵国から陸奥国への移住も進められ、実際に宮城県北部では武蔵国に特有の住居形態や土器をもった屯田兵的村も発見されている。

このように5世紀後半以降は、武蔵国(その前身の武蔵国造)は、大和朝廷や律令国家とのかかわりにおいて、移住や土地開発が活発に行われた。特に8世紀末から9世紀初頭において、集落の拡大や分村化が認められ、土地利用の高度化が認められる。これらの大規模な土地開発の主要因としては、桓武朝期の東北経営の本格化に伴う坂東諸国に課せられた兵士の動員や物資調達が考えられる。その過程で、武蔵野の樹木林はかなりの割合で、伐採、利用され、植生は大きく変化したものと推定される。

武蔵野の情景を、8世紀後半に成立したとされる万葉集の東歌から見てみよう。

「埼玉の 津に居る舟の 風をいたみ 網は絶ゆとも 言な絶えそね」

埼玉の船着場に停まっている舟の（もやい）網が、風が強くて切れることがあっても、言葉は絶やさないでください。

「武蔵野の 草は諸向き かもかくも 君がまにまに 我は寄りにしも」

武蔵野の草が同じ方向になびくように、どのようにでも、あなたの意のままに、私は従ってきたのに

「武蔵野の をぐきが雉（きざし） 立ち別れ 去にし夕より 背ろに逢はなふよ」

武蔵野の窪地に住む雉（きじ）のように、立ち別れて行ったあの晩から、私は夫に逢っていないなあ。

「多摩川に さらす手作り さらさらに 何そこの児の ここだかなしき」

多摩川で、さらす手作りの布のように、さらさらに、どうしてこの娘が、こんなに愛おしいのだろうか

寛仁四年（1020）、更級日記の筆者は、父の赴任地であった上総国から京に登る途中に通った武蔵国を次のように述べている。「まるで泥のような土地で 紫草が生えていると聞いた野原は、アシやススキばかりが高くて、弓を担いで乗った馬も隠してしまうほどだ」



いわき市水石山の萱原（かやはら）

鎌倉時代に勅撰された『続古今和歌集』にも、「武蔵野は 月の入るべき 嶺もなし 尾花  
が末に かかる白雲」と読まれ、山が見えないほど広大な平野には、林が少なく、ススキ  
(尾花)の萱原が続いていたようだ。

なお武蔵国には、平安時代に官営による4つの勅旨牧(場)が置かれ、毎年朝廷に良馬を  
納めていた。その後、牧野管理者から武士団が生まれ、武蔵七党と呼ばれた。

一の谷の合戦で、急坂を騎馬で駆け下りながら、源氏方の先陣を争ったのは七党の一つ西  
党出身の平山季重と熊谷直実、熊谷氏は同じ七党の私市党か丹波党の出身とされるが、明  
らかでない。いずれにせよ2者にまつわる物語は、騎馬が達者な武蔵七党の面目躍如とな  
っている。一の谷の合戦は、瀬戸内海の水軍を基盤とした平氏に対して、騎馬に長けた關  
東武士団を味方にした源氏の戦いを象徴的に表している。

写真は、福島県いわき市水石山である。平将門の軍事訓練を継承すると伝えられる相馬野  
馬追の馬が放牧されている。馬が草を食むために、野草間の優劣がコントロールされて、  
ススキと他の野草種が共生する、美しい萱(ススキ)原である。武蔵野もこのような萱原  
に馬が放牧されていたのであろう。

---

## 緑の文明首都戦略（4）

### 原風景としての萱原



萱原をイメージして製作したアゼターフ

ススキを茅・萱（かや）と言い、穂は「尾花」と歌われた。

武蔵野は一面に萱原が広がっていたことが、古代の更級日記に描かれ、また鎌倉時代の「続古今和歌集」に詠まれている。遺跡の発掘調査によれば、武蔵野において、5世紀後半には100棟程度の大規模集落が出現し、9世紀には多数の大規模集落の出現と分村化というように、高密度の土地利用が認められる。この過程で森林は切り開かれて、広大な萱原が出現した、ものと推定される。

萱原は、人との関わりによって形成された独自の生態系である。萱原は年に1～2回程度の草刈や野焼きによって維持される。草刈を行わないと森林に遷移する、また草刈をしすぎると、ススキが衰えて芝生（自然のノシバ）や裸地となる。

「武蔵野は 今日のはな焼きそ 若草の つまもこれあり 我もこれあり」伊勢物語  
武蔵野は今日は野焼きをしないでください。若草のような妻が隠れているし、私も隠れているのだから。

武蔵野は古代には官営の馬牧場が置かれ、鎌倉時代には騎馬を得意とする武蔵七党の拠点であった。武蔵野の人びとは、萱原に馬を放して飼料としたり、茅葺き屋根の材料としてススキを刈って利用した。

草刈や馬に食まれることによって維持される萱原は、オミナエシ・キキョウ・カワラナデ

シコなど、他の野草も豊富である。

「秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数えれば 七種の花」

「萩の花 尾花葛花 なでしこが花 をみなえし また藤袴 朝顔が花」

(山上臆良 万葉集)

野草の種類が多く、美しい萱原は、万葉集から謡われ、また桃山時代の成立した「琳派」の絵師や、その流れを汲む加山又三など近現代日本画家によって、題材とされてきた。



『夏秋草図屏風』酒井抱一 19世紀

萱原の美は、文学や絵画に描かれてきたために、日本人の心象に深く刻まれて、日本の原風景の一つとなった。都会育ちの人が、萱原を始めて見て、「なつかしい」という感情に抱かれるのは、そのためである。

---

## 緑の文明首都戦略（5）

木を植えた農民



武蔵野の美を凝縮した「野の花マット」（野草の基本種はアゼターフと同じだが、ススキなどのイネ科を含まない）

「昔の武蔵野は萱原のはてなき光景をもって絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である」

「武蔵野には決して禿山はない。一面の平原のようで、むしろ高台の所々が低く窪んで小さな谷をなしている。この谷の底は大概水田である。高台は林と畑とで様々の区画をなしている。畑はすなわち野である」

「野やら林やら、ただ乱雑に入り組んでいて、それが実に武蔵野に1種の特徴を与えていて、ここに自然あり、ここに生活ある」

（国木田独歩「武蔵野」 明治34年）



コナラを中心とした二次林

国木田独歩が描写した武蔵野の林は、2次林で、その多くは人工林であった。

武蔵野台地に位置する三富地区（現在の三芳町と川越市の一部）は、川越藩の領地で、柳

沢吉保の時に、新田開発を行った。

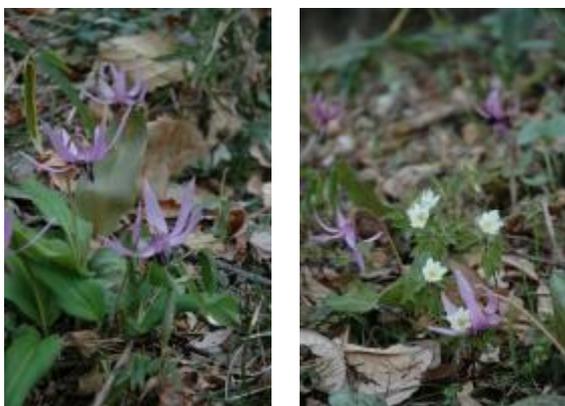
三富の開発は、道路を中心として区画された短冊状の敷地（約5ha）を配分するというように、整然とした耕地整理のもとに行われた。

1軒分の屋敷割りには、道路に面した表側を屋敷地として、その次に耕地を、一番奥を雑木林とした。開拓の農民には、3本つつナラの苗木が配布されたという

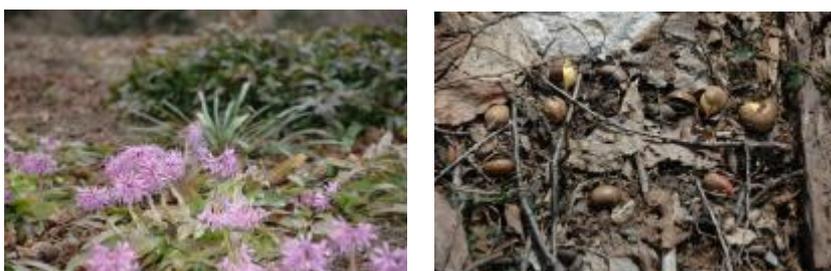
（「武蔵野の歴史」[www.asahi-net](http://www.asahi-net)）



屋敷林には、竹・ケヤキ・杉・ヒノキ・シラカシなどが、防風林として植栽されたが、これらの樹木は農具・運搬具としての竹の利用、ケヤキなどの建築材、シラカシのドングリなどの救荒食など、実用性があるものが選択された。



手入れされた林床のカタクリ・イチリンソウ



シヨウジョウバカマとドングリの芽だし

多くの武蔵野は、新規開拓された三富地区のように整然と区画されたものではなく、国木田独歩が描写するように、屋敷、林、畑、野がモザイクのように混在していたものと考えられる。雑木林は、既存の二次林を木炭材として有用なクヌギ・コナラなどを選択して育成する場合もあるが、三富地区のように、新たに植林して林を作り場合も多かったものと推定される。

林野は、当時の農業にとって重要である。

宮崎安貞『農業全書』（元禄十年、1697）は、草肥（くさごえ）、苗肥（なえごえ）、灰肥（はいごえ）、泥肥（どろごえ）を、4大肥料としている。草肥は山野の若い柴（低木類）や草を、積み重ねて腐らしたり、牛馬に敷かせたりしたもの。苗肥はマメ科植物、効用は一番だが、資源としては緑肥にかなわない。灰肥は、草木を焼却した灰で、有機物の植物が無機化するので、即効性がある。泥肥は、池の底の肥えた泥で、灰などとまぜて使用する。

雑木林の落ち葉堆肥は、優良な微生物を多く含むので、固い土に鋤き込むと水はけが良く酸素も豊富なフカフカの土になるように、土壌改良に最適で、他の肥料と一緒に施肥すると効果が大きい。

武蔵野の林野は、草1本枝葉一枚まで、人びとの生活にとって有用であった。林では、冬暖房用の薪や木炭材が、20～30年の周期というルールを守って伐採され、林を更新した。春にはタラの芽などの若芽が食用となり、晩秋は落ち葉を集めて堆肥を作る。

野は、山菜が採れ、ススキは屋根材として利用され、農の貴重な動力であった牛馬の餌場であり、草肥や灰肥の供給源として、十分に活用された。

江戸時代の農業は、自然と共生した。草肥や牛馬の飼い葉を確保するためには、田畑面積の10倍の山野が必要であったという試算がある（水元邦彦『徳川の国家デザイン』小学館日本の歴史 p 249）。

また武蔵野の林野も、20～30年に一度の伐採による萌芽更新や年1回以上の草刈、あるいは牛馬による草喰いによって、二次林や野原が維持されてきた。

---

## 緑の文明首都戦略（6）

### 武蔵野と江戸の境



武蔵野の美を凝縮した「野の花マット」（左060817、右060913撮影）

「武蔵野に特有な林を持った低い丘がそれからそれへと続いて眺められた」「斜草地、目もさめるような紅葉、畠の黒い土にくっきりと鮮やかな菊の一叢二叢、青々した菜畠」

上の文章は、田山花袋が、現在のNHK放送センターの筋向いにあった国木田独歩の家を訪れた際に、渋谷周辺を描写したものである。林、野（斜草地）、畠という武蔵野の要素が的確に描かれている。

aa.jpg 六本木ヒルズから渋谷方面の展望、富士山がかすかに遠望、クリックしてアップをご覧ください。

天正十八年（1590）、徳川家康は武蔵野台地にある江戸城に入ると間もなく、江戸城下の街づくりを開始した。街づくりの基礎になったのが日本橋を基点とした五街道の整備である。

3代家光の時代に完成した江戸城下町は、外堀の内側であった。ところが、明暦三年（1657）の大火によって、江戸城本丸はじめ城下の6割が焼失した。大火後は、延焼を防ぐために、火除地（緑地帯）の新設、武家屋敷や寺社の移転などが実施されたために、江戸城下町は外堀の外側まで拡大した。

拡大江戸城下町の範囲は、五街道の基点である日本橋から、二里（8km）から二里半（10キロ）の距離である。

品川宿（東海道、日本橋から8km）

千住宿（日光街道・奥州街道、日本橋から 8.8 km）

板橋宿（中山道、日本橋から 10 km）

内藤新宿（甲州街道、日本橋から 8 km）

日本橋から街道ごとの玄関口までの距離は、江戸庶民が徒歩で十分に日帰りできる距離であり、江戸の外側を囲む武蔵野は江戸庶民にとって身近な存在であった。

江戸の四季といえば、春は上野の桜、夏は御茶ノ水の蛍、秋は武蔵野の月、冬は日暮里の雪が有名で、享保（8代吉宗）以降は、武蔵野の小金井の桜も名所となった。

---

## 緑の文明首都戦略（7）

### 江戸の経済を支えた武蔵野



武蔵野の美を凝縮した「野の花マット」の生産

江戸市場の拡大とともに発達してきた近距離経済を江戸地廻り経済と言い、葉物（野菜）の産地は次のようなところが有名であった。

菜：小松川（江東区）、小菅（葛飾区）、堀切（葛飾区）、亀戸（江東区）

ネギ：千住（荒川区）、金町（葛飾区）、砂村新田（江東区）、深谷（埼玉）、岩槻

大根：練馬、中野、三浦（神奈川）

さつま芋：三芳（埼玉）、富士見（埼玉）、所沢

じゃがいも：大宮染谷（埼玉）

人参：中野、練馬、戸越（品川区）、久ヶ原（大田区）、大井（品川区）、馬込（大田区）

ゴボウ：練馬、春日部、大宮、保土ヶ谷

これらの産地は、江戸城下町を囲む武蔵野と隅田川河口の低地帯である。埼玉県下の産地は、荒川流域にあり、川舟を使って、日本橋の市場まで運ばれた。

武蔵野と江戸の経済を整理すると、武蔵野からは野菜、薪炭、麦、そして起伏のある地形を生かした水車による穀物粉（そば、うどん粉）が問屋を通して江戸市場に供給された。

また江戸からは、瀬戸物、下肥、糠が武蔵野に供給された。

## 緑の文明首都戦略（8）

### 武蔵野から引かれた江戸の水道



武蔵野の美を凝縮した「野の花マット」(左080622、右070913撮影)

江戸庶民にとって、武蔵野の最大の恩恵は水である。江戸の下町は埋立地であるため、井戸を掘っても塩分が多く、飲料に適さなかった。

家康は入国当初から武蔵野から水を導水を計画しており、内藤昌『江戸と江戸城』などを参考としながら、以下にまとめてみよう。



江戸時代の宿場町を伝える大内宿（福島県下郷町）、水路では野菜を洗ったり、果物や飲み物を冷やしたりする。



江戸時代に作られた水路（日光東照宮）

江戸時代初期の上水道計画は、まずは当時平河と呼ばれた現在の神田川を利用する「神田上水」の整備から行われた。平河（神田川）は井の頭池を源泉とし、さらに支流に善福寺川と妙正寺川を持つので、水量が豊富である。この流れを、目白台（椿山荘の辺り）・小日向台の麓を沿わせて、水戸藩の後楽園の中を流し、水道橋近くで木樋で平河を渡した。ここから、暗渠として、神田、日本橋、京橋の一部に給水した。



鍋や野菜を洗ったりして、今も生活と結びついている水路（福島県南会津町）



江戸時代をしのばせる木樋と水車（福島県南会津町）

江戸城下町の拡大に伴って飲料水が不足してきたために、幕府は多摩川から導水する上水路を開削する「玉川上水」を計画した。

老中松平伊豆守信綱（川越藩主）の下、水道奉行に伊奈忠治が就き、庄右衛門・清右衛門兄弟が工事を請け負ったとされるが、詳細は不明である。

承応二年（1653）年4月に工事を開始、翌三年より江戸市中の通水が開始された。羽村で多摩川から取水し、四谷大木戸までの43kmは開渠で、四谷水番所からは木樋・石樋による暗渠とした。上水道は3分され、1つは江戸城、2つは麴町一帯、3つ目は四谷伝馬町から虎ノ門・芝・築地方面に給水された。

万治三年（1660）、明暦の大火（1657）後の江戸城下町再興に伴って、青山上水が玉川上水より分水され、青山・麻布に給水した。

寛文四年（1664）には三田上水が玉川上水より分水されて、代々木・三田・目黒・白金・大崎に給水された。

寛文十年（1670）、玉川上水が拡張されて、両岸に桜が植樹された。以後玉川上水は桜の名所となり、広重「名所江戸百景」にも描かれている。

さて、玉川上水は上水道を目的にしたものであるが、開削を指揮した松平伊豆守は、領内の野火止（埼玉県新座市）への分水が許されたので、「野火止用水」を開削して、大規模な新田開発を行った。

玉川上水は、小平市までは現在も細々ではあるが上水道として機能しているものの、それから都心にかけては水が枯渇した状態となっていた。東京都では、1986年以降「清流

復活事業」として玉川上水の枯渇域に、高度処理した下水を放流して、流れを復活させている。

また羽村取水口から四谷大木戸までの、開渠として残る30.4kmが国の史跡に指定された。大都市江戸の用水供給施設として、また武蔵野台地における近世灌漑用水として貴重な土木遺産である、というのが指定の理由である。

「茶屋の横を流れる溝の水は多分、小金井の水道から引いたものらしく、よく澄んでいて、青草の間を、さも心地よさそうに流れて、小鳥が来て翼をひたし、喉を潤おすのを待っているらしい。しかし婆さんはなんとも思わないでこの水で朝夕、鍋釜を洗うようだった」(国木田独歩 「武蔵野」)

東京都内を人間らしい街に環境改善するためにも、玉川上水の復活は重要である。

---

## 緑の文明首都戦略（9）

### 環境文化都市：江戸



武蔵野の美を凝縮した野の花マット

江戸の人口は100万で、当時としては世界屈指の大都市であったが、自然と共生し、独自の庭園文化が開花したという点で、まさに環境文化都市であった。

江戸の緑被率は、約40%であったという試算がある（『江戸東京学事典』三省堂）。江戸の緑地としては、崖（ハケ）の斜面林や斜面草地と大名屋敷などの庭園があり、また武蔵野から引かれた上水道が、それぞれの緑地をネットワークして、環境効果を高めていた。

「江戸市中でさえも、ひろびろとした緑の斜面とか、寺の庭園とか、樹木のよくしげった公園とかがあって、目を楽しませてくれる」（オール・コック「大君の都」1859～62年）。



小石川後樂園の中を通る神田上水



小石川後樂園の田園



左：小石川後樂園の菖蒲田、右：山里の茶屋をイメージした「丸屋」

江戸の庭園については、進士五十八先生の先駆的研究がある（『日本庭園の特質』）。江戸の大名庭園は、移動とともに場面が変化する「回遊式庭園」である。機能としては、①社交・外交・集会などの政治施設であったり、②鴨猟、花園、菜園、薬園などのレクリエーション施設であったりと、鑑賞だけでなく、多面的に利用されている。

私は、江戸の庭園を環境文化という観点で見た場合、以下の要素を指摘できると思う。1) 自然や農の再現、2) 江戸と地方の文化交流（参勤交代により江戸の庭園文化が地方に波及）、3) 年中行事の確立（花見と紅葉狩）、4) 園芸文化（地方の珍草奇木が全国から集まり、江戸は見本市）、5) 植木・花卉産業の育成（豊島区駒込、巣鴨周辺が一大産地）。



左：千川上水を利用した六義園、右：山里をイメージした「楓の茶屋」

これらの要素のうち、自然や農の再現について述べてみたい。

日本と同じく古い歴史をもつイスラムの庭園は、建物に囲まれた方形の中庭に、方形の池があり、その周囲に草花な植栽されている。この庭園はイスラムの現世を超越した理想的な世界を描写したものと考えられ、方形や直線でデザインされている。

これに対して日本の造園は、飛鳥時代こそ、朝鮮半島からの渡来文化の影響を受けて、方形池がつくられるが、奈良時代以降は自然の風景を取り入れて、曲線を用いたデザインが伝統的に継承される。

自然をモチーフとしながらも、茶庭や枯山水式など、時代ごとの庭園形式が成立する。江戸の回遊式庭園は、芝生広場などの自然をデフォルメした空間や名所の縮景などの場면을回遊にしたがって変化させ、さらには動線のポイントには稀岩を配置するというように、造形的な空間である。しかし、江戸の代表的な庭園とされる水戸藩の小石川後樂園や老中柳沢吉保の六義園においては、山里や田園風景を再現した空間があり、当時の支配者層においてもこれらの風景は心を癒すものであったと考えられる。



左：修学院離宮に取り込まれた田園、右：桂離宮の茶室より望む田園

庭園の中に、田園風景を取り入れることは、江戸時代初期の修学院離宮や桂離宮にその萌芽が認められ、以後江戸の大名庭園に継承された。現代においても、造形的デザインと自然、あるいは田園風景の調和ないし取り入れは、人間性の回復という点で、再評価されるべきであろう。

## 緑の文明首都戦略（10）

### 昭和天皇のご遺志



野の花マットの蜜を吸う蝶たち

江戸城は、外濠と内濠に囲まれ、しかもそれらの濠が武蔵野から引かれた上水道によって、江戸市内の緑地と結ばれていたために、水と緑のネットワークの拠点であった。そして現在の皇居には、貴重な自然環境が残っていて、東京の肺として、大都市に呼吸させている。



皇居（江戸城）の濠



左：江戸城大手門周辺、右：本丸周辺

故昭和天皇は、植物学者であった。現天皇もたいへん植物に対して造詣が深いといわれて

いる。

昭和天皇のご発意によって、昭和58年から60年にかけて、二の丸跡に、武蔵野の雑木林が復元された。また本丸跡においても、随所に武蔵野の野草が植栽されている。

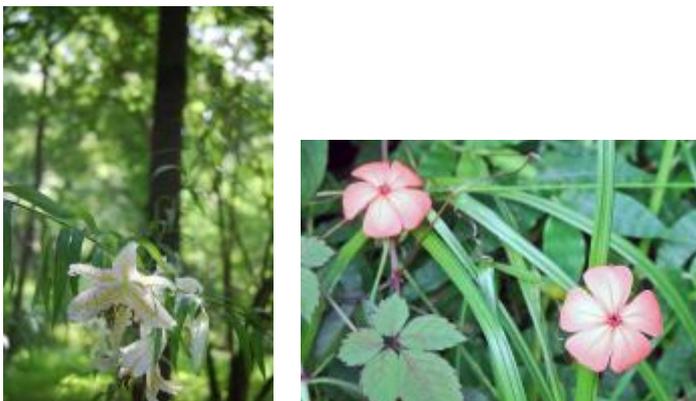
現在皇居には、蝶やトンボをはじめとして、多種類の小動物が生息しているが、その基盤となっているのが二の丸を初めとする武蔵野の植生である。



左：雑木林、右：オニユリ（二の丸）



左：オミナエシ・キキョウ、右：ヤブカンゾウ（二の丸）



左：ヤマユリ、右：フシグロセンノウ（二の丸）

現在の皇居は、武蔵野生態系の拠点である。皇居の周辺ビルの屋上などに武蔵野の植生が

復元されれば、蝶など飛行昆虫が行き来して、生息域を広げることができる。生態系から見た首都東京の環境戦略は、小動物を孤立させずに、生息域を拡大することである。

昭和天皇は、二の丸に武蔵野の雑木林を復元することによって、東京の生態系回復の種子を播かれた。

## 緑の文明首都戦略（11）

ル・コルビュジェ「輝く都市」（1935年）

「自然と人間は、統一と協調を保っているものであって、自然の外に拵えものの社会があるわけではない」（デカルト）



都心を癒す「野の花マット」（東京大崎・シンクパーク）。

20世紀最高の建築家とされるル・コルビュジェは、人間と自然の関係を深く思索した思想家でもあった。

「時代が問題に与えるべき解答を判断する基準は一つしかない。それは、人間的ということである」

「努力すべきことは、人間とその環境の間の均衡を保つことである」

「環境とは、その永遠に変わらざる本質において新しく見直された環境のこと、すなわち、それは自然にはかならない」



都心に深呼吸させる「野の花マット」（東京大崎、シンクパーク）

ル・コルビュジェが「輝く都市」を著した1930年代は、欧米の都市化が進む一方で、人間疎外が深刻となっていた。

人間性を回復させるためには、太陽、空間、緑という「自然条件」を都市の中に復活させる必要がある。そのためには、高層建築を広い間隔を置いて建てて、広い緑地を確保する必要があると、コルビュジェは主張する。

これは「輝く都市」より2年遡る1933年、コルビュジェが中心となって活動したCIAM（現代建築の国際会議）のアテネ憲章を踏襲・発展させたものである。

コルビュジェは、高層建築を建てることによって、緑地の確保、職住近接、レクリエーション・教養施設の近接、などの効果があると主張する。

これらの居住者の便益性は、エベネザー・ハワード「明日の田園都市」（1902年）の中で展開されているものであるが、コルビュジェは平面的な田園都市構想は広大な土地と膨大な経費を必要とする点で、非現実的であると断じる。



都心を彩る「野の花マット」（東京大崎・シンクパーク）

さてコルビュジェは、「（平屋根に）庭園を拵えるならば、コンクリートや鉄の膨張という非常に恐ろしい結果を未然に防止することになるであろう」と、屋上庭園の将来性を先見している。

「輝く都市」とは、人間性を回復させるために「太陽」「空間」「緑」が確保された都市であり、高層建築を建てる目的もそこにある。そしてここで言う「緑」とは「自然」である。高層ビルが林立して、自然が失われている東京やニューヨークなど現代巨大都市の状況は、コルビュジェの理想とは正反対のものである。

## 緑の文明首都戦略（完結編）

東京憲章（案）

「太陽」「空間」「自然」「水」（都市計画の基本要素）



都心を冷ます「野の花マット」（東京大崎・シンクパーク）

山菜、薬草、あるいは高度な木造建築など、日本は縄文時代以来、自然からの恵みを生活に活かし、あるいは生活の身近に野の花をおいて鑑賞し、または自然を題材として文学や絵画に描くことなどによって、緑の文明を築いてきた。

江戸は、市中に緑が多く、しかもそれらが武蔵野から引かれた水道によってネットワークされており、まさに緑の文明にふさわしい首都であった。

江戸の緑の多くは、崖（ハケ）の雑木林や草地であった。すなわち江戸市中においても、武蔵野の自然が残されていた。

また江戸の台所は、野菜など近郊の武蔵野が支えたが、武蔵野は農地、草地、雑木林が一体となったものであった。江戸の農業は、草地の緑肥や雑木林の木の葉堆肥を活用することで成り立っていた。そして草地も雑木林も人が手を加えることによって維持されていた。



都心を生かす「野の花マット」（東京大崎・シンクパーク）

しかし、現在の東京は、都市化と自然とのバランスを崩した結果、極度のストレスなどによって人間性が疎外されている。

1933年、CIAM（現代建築の国際会議）は、人間性を回復するために、「太陽」「空間」「緑」を都市計画の基礎とした「アテネ憲章」を構想した。高層建築は、あくまで広い間隔をおいて建てるのが前提であり、広い緑地を確保するための手段として、積極的に評価された。

東京やニューヨークなど現代巨大都市が、高層建築が林立し、都市化による人間性の疎外問題が深刻化する現状にあつては、あらためてアテネ憲章を再評価する必要がある。しかし江戸・東京の歴史を振り返れば、水が重要であるので、「太陽（SUN）」「空間（SPACE）」「自然（NATURE）」に「水（WATER）」を加えた、「東京憲章」を提案したい。

アテネ憲章では「緑」としているが、この憲章を主導したル・コルビュジェは「環境とは、それは自然にはかならない」と述べている（「輝く都市」）。

「(ステップの) ひどく貧しい植生は『牧草地』という名前を与えられている」

「オアシスはオリエント文明の最初の『楽園』で、そこには木があり、泉があり、バラの花があった。多くの有用な植物や農具も、発明から早い時期に利用されるようになった」(ブローデル「地中海」)。

日本の自然は、オアシスよりもはるかに豊かで、人間との関わりも密接であった。したがって、都市計画の目的は単なる「緑化」ではなく、歴史的文化的要素も含んだ「自然回復」であるべきであろう。

「建築とは目の前の物体だけを指すのではない。それが出来上がるまでの歴史や土地の文化をまるごと含んでいる存在だ。アーキテクチャーとビルディングの違いはそこにある」  
(ル・コルビュジェ『New World of Space』)

東京の自然回復とは、武蔵野の再生である。武蔵野の自然は、人との関わりによって維持されてきた二次的自然である。そこには特有の生態系が形成された。わが国における環境戦略のキーワードである生物多様性も、東京においては武蔵野を再生することによって実現される。



生物多様性は人間多様性の基礎（東京大崎・シンクパーク）

「単にテクニカルを超えた人間的、文化的なものとしてのテクノロジー」（ドラッカー「傍観者の時代」）

東京の屋上緑化や壁面緑化を、単に手段としての緑化技術ではなく、文化的なテクノロジーとするためには、「武蔵野の再生による人間性回復」という基本理念が必要である。

アゼターフや「野の花マット」の開発は、この理念のもとに行っている。